

# 老 い る ま で

星 眞理子

「夫を語る」というテーマで随筆を書くよう依頼されて、思うように筆が運ばず、もう何日何夜を過したことでしょ。

私達がお互いに定位家族を離れ、新たに自分達の生殖家族を創って、かれこれ五年。現在には三人家族で、主婦である私は毎日家事と育児に忙殺されている。夫は？というところ。

庭の隅にしゃがみ込んで移植鋤で土を掘り何やら摘みあげては傍の器にはじくように移している。手前には黄色い布バケツ、グルテン、小箱、釣竿等々。その布バケツをまだヨチヨチ歩きの娘がニコニコ顔で引きずって「チャーチャン、チャーチャン」と夫を呼んでいる。夫は声だけの返事。どうやら夫は脱走する気らしい。行き先は池に決まっている。鮎を釣るのだ。これから暗くなるまでの何時間か、自ら蚊の餌食になりながらも、誰にも邪魔されることなく、楽しい自己との対話の時を持つようとしているのだ。ひとつふた

つ問うてみる。「どこへ行くの。」「殺生しちゃだめよ。」やっぱり馬の耳に念仏。でも問う方が行き甲斐があるだろうし、生き甲斐（老人となった時の）にもつながるだろう……。

やがて準備万端整えて自転車を押し出す。憎らしいけど羨ましい瞬間。私も心のリフレッシュの為の孤独な時間が欲しい！と声にしたけれど、娘のことを思うと我慢。

夫のリフレッシュの方法はその他にもあるようだ。例えばたまたま興味を持った手打ちうどんは撥ってプロ並み（？）。どちらかというと器用なのか、私の注文通り、収納棚や電灯の笠を製作してくれた。この製作に要する時間があるいはリフレッシュの時のなかもしれない。それにしても器用で神経質な人間と全く反対の人間が同居すると何かと不都合が生じ易いことも事実のようだ。

今夜は夫が珍しく、育児と家事に疲れた私の為に、コール・コーヒーを入れてくれると言う。私は喜んでリビングでくつろいでいることにしたその時、「この棒、これ何。」という声。しばらく考えてしまったと思つたが後の祭。間もなく夫が私の目の前へ差し出した物は、調理し忘れた牛蒡だった。しかも暑さも手伝って萎びてしまっていた。夫は冷やか

に、そして静かに、「台所にこんながある」と僕は生きる元気がなくなる。」と。そうでしょうとも。でも私が夫なら、黙ってそっと捨てるでしょうがね、牛蒡を。追求される側の心理が容易に理解できる私は、例えば夫が失敗しても、至って寛容に対処する。もちろん「怒る人が居ないっていいね」と、少し大きな釘を刺すのも忘れずに。やはり私は無神経な人間なのかしら。

そうかと思えば、私の笑い声が大きくて、眠ったばかりの子供が起きるから、夜九時を過ぎたら無声音で笑うか、笑うなと言う。それで「じゃあ子供の頃、夜九時以降は笑えなかったの。町内で決まったの。」と問うた。すると何のことはない、私の問いに夫自身が吹き出しているのである。

この夫と、さああと何年一緒にこんな事を言い合って生きてゆくのでしょうか。夫婦は運命共同体。私の生涯のパートナーはどんな「ひと」なのでしょう。幾つになっても何年一緒に暮しても不可解なのかしら。でも何でも考え合って年老いてゆけたら最良でしょうね。

（ほし まりこ 前編集委員長 本学星明先生夫人）